

国王不在の時代におけるピューリタン・ミニマリズム様式

—1650年代における英国のカントリーハウス詩の一研究—

岡田 宏子

Puritan Minimalism in the Interregnum:
A Study of English Country House Poetry in 1650s

Hiroko OKADA

1649年1月に、ロンドンのホワイトホール宮殿の一部であるバンケットハウスの外に作られた処刑台において、チャールズ一世は首を刎ねられた。1647年に監禁中の王は長老派右翼政権の成立したスコットランドに逃亡し、スコットランドと軍事同盟を結ぶと英国各地に王党派の反乱が起こった。スコットランド軍も南下して第二次内乱が始まったが、議会及び軍隊の独立派と平等派の軍が結集して王党派そしてスコットランド軍を破り、次の年にチャールズ一世を捕えた。その結末が、国王の処刑であったのだ。この時に始まった空位期、即ち国王の不在の時期は、共和制、護国卿制の時代を経て1660年の政治的混迷のさなかに、まるで奇跡のように到来した王政復古が承認され、その結果チャールズ二世が亡命先のフランスから帰国して終わった。

1642年から1649年までの英国の内乱は、まさに英国近代初期の歴史の分水嶺ともいべき出来事であり、それを挟む前後のチャールズ一世朝とチャールズ二世朝とは、全く異質の時代であったのである。本稿では、共和制、護国卿制の時代、1650年から1660年の王政復古までの国王不在の10年間に書かれたカントリーハウス詩の中から、内乱で破壊された屋敷の再建をテーマにした、マーガレット・キャヴェンディッシュ (Margaret Cavendish) とマイルドメイ・フェイン (Mildmay Fane) 作の詩を各々一篇ずつ、そして同じくフェイン作の彼の弟のカントリーハウス、フルベック邸の新築祝いの詩を検討し、その中に表現された住まうという人間の基本的な生活の аспек্টに、伝統的な実用の尊重から、さらに便利さを追求する、近代への意識の萌芽を探り¹⁾、それをくみ上げて、しかも二つの異なった時代を繋ぎ、後世にも影響したという建築様式、ピューリタン・ミニマリズムについても考察を試みるものである²⁾。

カントリーハウスの再建や建築については、まず、共和制、護国卿制の時代の政治的背景を簡単に述べる必要がある。国王処刑を決定した残部議会は、長老派議員を追放して、独立派議員のみから成り、下院を最高の権力機関と決議していたため、1649年1月以降、所有階級の人々は富の所有関係が異なった形態になるのではと、困惑や不安に一抹の希望も入り交じった混乱状態の中にいた。この残部議会の後盾である軍隊や最高幹部の間でも、国王処刑に反対したフェアファックス将軍の存在が示すような意見の相違があり、ま

た司官、下士官、平等派などそれぞれの間で不和があった。そのためクロムウェルは、残部議会の解散後作られた急進的な第五王国派を多く含むペアボーン議会をも解散して、1653年に護国卿に就任せざるを得なかった。英国は、これで平等派の主張した徹底した民主化への方向ではなく、国王は存在しないが、内乱当初からの政治的原則、即ち、英国は所有階級の国家であり、国家権力は所有階級の権力であるという方向を目指すことが明確になった。

王党派から見れば、従来の反体制派が体制となり、かつまた、伝統的な所有の利益が確保されたとは言え、その当時は必ずしもカントリーハウスの建築には適さない時節であるのに、そのような建築は行なわれた³⁾。政情不安にもかかわらず、カントリーハウスの建築が敢えて遂行されるのは、階級上昇の梯子がやはり第一に土地への投資にあり、広い土地が確保されるとカントリーハウスの建築を行ない、富裕な階級との交際の仲間入りをする足がかりを作るというプロセスが普通だったからであった。

たとえば、エリザベス朝の法律家、リチャード・ブラウンロウ (Richard Brownlow) は、慎ましい生活をして、土地持ちのジェントリとなるために収入の殆どを土地に投資し、1610年にリンカンシャのベルトンへ土地を買い、1621年には息子が結婚して古いベルトン・ハウスへ住み、チャールズ一世に准男爵に叙せられた。彼は内乱の時には議会派軍に荷担したのだが、王制復古後には立派な新しいベルトン・ハウスを彼の孫が建設した⁴⁾。

革新派が支配体制となり、保守派が反体制勢力となった1650年代には、当然王党派の人々は下野を余儀なくされ、フランスへ亡命したチャールズ二世に従った人々をはじめ、同国へ逃げた人もあった。しかし、既に述べたように、英国にとどまり内乱で荒れ果てたカントリーハウスの建築や改築を行い、庭園を造り、自然の観照に耽った人々がいた。

顕著な例は、四代目のペンブローク伯の二番目の妻、アンの凄じいカントリーハウス改築への執念である。彼女は婚家の立派なカントリーハウス、ウルトンから不実な夫に愛想を尽かして、38年に及ぶ訴訟の結果取り戻した北方の自分の土地に戻り、1650年代には六つのカントリーハウスの修復を完成させた。彼女の行為がクロムウェルの怒りをかうかもしれないと言われると、「クロムウェルが何度私の屋敷を破壊しても、自分のポケットに一シリングでも残っている間は、それを元通りにする」と答えた。その激しい言葉を彼女の伝記作者が伝えている。アンは、その外にも同じ頃私設救貧院を建ててノブレスオブリジェを果たし、二つの教会を修理して信仰にも忠実であった⁵⁾。16世紀のハードウィックのベス同様に、1650年代にさえ財産を持った貴族の女性は、私的な空間として「自分自身の部屋」を所有するというレベルを遥かに超えて、時の権力者にも屈せず「自分自身のカントリーハウス」を六軒も持つことができたのだった。

しかし、アンとは対照的な貴族も当然存在する。実際、内乱で経済的に疲弊した貴族も多かったのだ。共和制、護国卿時代を通じて国内外の戦争続きで経済的に行き詰まっていたクロムウェルは、王党派の人々のカントリーハウスを没収して売り払い戦費に当てた。元の所有者は、別の土地を売ってそれを買い戻す羽目に陥ることもあったが、それも不可能な貴族もいた。ニューカッスル侯ウィリアム・キャヴェンディッシュはその一人で、妻マーガレットは亡命先のパリから病いの夫を残して1653年に帰国し、没収財産委員会に没収された夫のお気に入りのカントリーハウス、ダービシャー州の由緒あるボルソーヴァ・キャッスルを返して欲しいと嘆願したが聞き入れられなかった。

彼女のこの家への執着には、それなりの理由があった。ボルソーヴァ・キャッスルは小規模ながら、17世紀の初めには目新しい古典様式で建てられ、内乱前に英国一美しいとたたえる詩が書かれた程の美しい家であったのだ⁶⁾。1634年にチャールズ一世もここを訪問し、ジョンソンの仮面劇の上演などで豪華なもてなしを受けた。

しかし、その家も内乱中両軍の陣営となって荒れ放題で、屋敷の買い手はその家を解体しようとした。幸いその寸前に、夫の弟であるチャールズ・キャヴェンディッシュが寛容にも五千ポンドの示談金を支払ってボルソーヴァ・キャッスルを買い戻してくれた。チャールズの気高い偉業に対して深い感謝の念を表すために、英国17世紀女性作家の先駆者の一人であるマーガレットは、「慈悲深い騎士と戦いで廃虚になった城とのダイアローグ」(“Dialogue between a Bountiful Knight and a Castle Ruined in War”)と題する五十行余りの短いカントリーハウス詩を1651年から1653年の間に書いた。この詩において彼女は、彼の身分と美しい屋敷に敬意を払うには相応しい詩の形式、つまり破壊されたボルソーヴァ・キャッスルを擬人化した「城」と、城を救った高貴な「騎士」との間に交わされる対話という騎士道ロマンス風のユニークな形式を創造している。実際、この屋敷では中世風というよりは、スペンサーの『フェアリー・クイーン』の世界さながらのトーナメントなどが時々催されていたのであった⁷⁾。

ベン・ジョンソン以来のカントリーハウス詩のジャンルでは、しばしば詩人がパトロン
の賛美を、擬人化されたカントリーハウスに一方的に語りかける形式で表現する方法かなり常套的に用いられている。しかし、それから約40年後にマーガレット・キャヴェンディッシュはその手法をこの詩において逆転させた。カントリーハウスは詩人の賛辞に対して終始沈黙する聞き手であることを止め、自らに刻み込まれた歴史の苦しみを語る積極的な主体となった。屋敷の被った内乱時の野蛮な破壊行為は、擬人化されたカントリーハウスの生身の肉体へ加えられた痛ましい暴行であり、そのため瀕死の際にあるに等しい状態の「城」が救い主の高貴な「騎士」の手にかかって死にたいと直接的に訴えて、自らのメッセージを発しているのである。

「慈悲深い騎士と戦いで廃虚になった城とのダイアローグ」は二つの対話から構成され、最初の対話は、ボルソーヴァが人々の賞賛的であった内乱以前の過去の美しさや豊かさ
と、内乱後の廃虚同然の現在の醜さや不毛とを対比している。「騎士」は昔日の面影を失ない別人のような「城」の変化の大きさに驚き、“Alas, poor Castle”と美しさと完全な健康を失い、病み衰え富を失った「城」に呼びかける。

KNIGHT: Alas, poor Castle, how great is thy change
From thy first form! To me thou dost seem strange.
I left thee comely, and imperfect health;
Now thou art withered, and decayed in wealth. (11.1-4.)

それに対して「城」は、「城」(ボルソーヴァ)の由緒正しさを、16世紀にこれを建てた「騎士」の父、マーガレットにとっては義父にあたる一代前のチャールズ・キャヴェンディッシュ——英国を代表するカントリーハウス、ハードウィックとチャッツワースの建築者、通称ハードウィックのベスの次男であり、彼自身もスミスソンのパトロンであった——、そ

して父の死後柱廊を整えて、小高い丘の上に建つこの屋敷を更に美しくした「騎士」の兄、マーガレットの夫ウィリアムの功績を称えた。

CASTLE: O noble Sir, I from your stock was raised,
 Flourished in plenty, and by all men praised:
 For your most valiant father did me build,
 Your brother furnished me, my neck did gild;
 Towers upon my head like crowns were placed;
 Walls, like a girdle, went about my waist;
 And on this pleasant hill he set me high..... (11.5-11.)

尖塔は、奢侈の象徴としてカントリーハウス詩で非難されているが、多くの尖塔を頭に冠の様に頂いているボルソーヴァは、尖塔一冠のメタファーにより、ギリシャ神話の尖塔のついた冠をかぶり、the Great Mother とも呼ばれる穀物と多産の女神シベールのイメージを与えられて神格化されている⁹⁾。普通、擬人化されたカントリーハウスは男性であるが、マーガレットはボルソーヴァを女性に見立てている。冠は夫のマンズフィールド子爵時代の紋章の図柄の一部への言及であるとしても、この詩においてボルソーヴァを女性と解釈すると、以下に続く首には金箔の飾りをつけ、立派にめぐらされた塀をウエストに帯のように巻いた「城」の姿の描写は納得のいくものとなる。

荒廃しても、恰も女神のように冠を頂く「城」が眼下の谷を見下ろすと、かつては畑や囲い地はそれぞれが庭のようであり、緑の牧草がはえる牧場には肥えた羊がおり、乳牛の鳴き声がしていたのに(13-16行)、その風景も今はない。無垢の美しかったパストラル的風景への喪失感、単なるノスタルジックな感慨のみではなく、ボルソーヴァの経済基盤喪失への深い絶望であるだけに深刻である。

By wars I'm now destroyed, all right's o'erpowered:
 Beauty and innocency are devoured. (11.17-8.)

内乱の陣営として使用されると、美しい家中に武器が下げられ、弾丸は「城」の脇腹を貫いて取り巻く塀を壊しその大量の残骸は重く「城」の上にのしかかっている。息もつけないほどの埃に水を求めても、地下をほう水道管は切断されている始末である(23-31行)⁹⁾。その上窓も破れ、寒風に震える「城」は「私の経済的苦境を救って下さるか、さもなければあなたの尊い手で殺して欲しい」と「騎士」に懇願する。騎士道精神においては、理想の女性のために一身を投げ打って尽くすべきことも、重要な徳目の一つであった。「騎士」は謙虚にへりくだった態度で、中世の騎士物語りさながらに「城」の命を賭けた願いを全て聞き入れ、彼が真の騎士であることを証明する。

後にリチャード・フレックノウが書いた、別のカントリーハウス、フルベックにある、書物以外には鏡一枚すらない僧院の一室のような私室——当時としては風変わりな貴婦人の部屋——について的一篇のクローゼット・ポエムが示しているように¹⁰⁾、現在では普通に見えるマーガレットの生き方は、時代を先取りしていた。彼女が当時の常識的な貴婦人

とは見做されなかった事実を鑑みれば、「騎士」であるチャールズ・キャヴェンディッシュは必ずしも彼女のためではなく、兄のために途方もない大金を投じてボルソーヴァを救ったのかもしれない¹¹⁾。しかし、マーガレットは多分兄弟愛からのその高潔な行為を、「慈悲深い騎士と戦いで廃虚になった城とのダイアローグ」において、中世の騎士道ロマンスの物語の文学の伝統という虚構に移し変えて、称えることに成功している。

二番目の対話では、ヌヴォリシュ（成り金）とは違って、真正の貴族であるハードウィックのベスの三男、チャールズと目される「騎士」が控えめな口調で、「あまりお役には立たない」けれどもと切り出し、まず、うちひしがれた「城」の渇きや苦しみを消すために、自らの目から流れる悲しみの涙で潤して差し上げようと、心からの同情の念を表明する。

KNIGHT: Alas, poor Castle, I small help can bring:

Yet shall my heart supply the former spring,

From whence the water of fresh tears shall rise

To quench thy drought: I'll spout them from mine eyes. (11.37-40.)

ノブレスオブリジェの最高の行為には、それに優るとも劣らない高貴な温かい心があることをマーガレットは十分理解していたのだ。政治体制が変わったとはいえ、本来自分の所有であったエステートを取り戻すために高額な代金を支払う理不尽さは、示談金と没収委員会が呼んでいたものを、「敵に支払う身の代金」と言い換えられて体制の隠蔽している事柄の本質を露に暴き出している。

That wealth have I, for to release thy woe,

I'll offer for a ransom to thy foe..... (11.41-2.)

廃虚と化した「城」は病人であり、その健康を取り戻すためには破壊された塙を修理しようと「騎士」は約束する。病気はしばしばさまざまな無秩序の表象として文学の中で機能している。この詩における、“wealth”（41行）と“health”（43行）の韻律的な効果はそれ自体強い意味を表現する。メタフォリカルな意味においても、病人の“health”を回復するものは“wealth”しかないのである。

47行目の“freedom”は、まさにボルソーヴァの所有の自由を意味し、天下晴れて念願を果たした喜びにたいして「城」は深甚の感謝を述べて第二の対話は結ばれ詩は終わっている。「城」に可能なことは、「騎士」の名声が後世に語り継がれ、神がこの気高い行為に対して、ボルソーヴァが蒙った不幸から彼を守って下さいます様にと、また、「城」が神の加護により生き長らえて感謝の念を表せるようにと祈ることのみであった。実際、この詩が書かれて、騒乱の時代の劇的な出来事は不朽のものとなった。

同じように、内乱のために破壊されたカントリーハウスであっても、経済的に再建が可能な屋敷は存在した。レスター州のベルボワール・キャッスルは砦を起源とするカントリーハウスだけあって、天然の要塞の地にあったため、穏健な議会派であったラトランド伯のこの屋敷は第一次、二次両内乱時に、王党派軍に陣営として使われた。ベルボワールはもとラトランド伯爵夫人の家系に属していたので、彼女が積極的にベルボワール再建に

乗り出していた。その点は、まだ工事が進行中にそこを訪問した王党派の貴族、ウエストモーランド卿、マイルドメイ・フェインによって1659年10月に書かれた「ラトランド伯爵夫人のために：最近の内乱により破壊された後のベルボワールの新たな再建について」(“To the Countess of Rutland, upon Her New Re-edifying of Belvoir after It Had Been Ruined by the Late Civil War”)という賞賛の詩の長い題名にも明らかである。

護国卿体制下にあったが、17世紀も半ばになるとカントリーハウスの建築に関してはかなり新しい理念や技術が導入されていた。ベルボワールより早く、内乱以前に小高い丘に立っていたボルソーヴァにしても、17世紀の始めに英国でもっとも早く水を導入した庭園をもち、水道管も地下に埋設されていたのである。ベルボワールは、さらに新しい点がある。ファウラーによれば、フェインのベルボワール賛のこの詩は、近代的な意味での建築家に初めて言及したカントリーハウス詩だということである¹²⁾。約半世紀前に創始されたカントリーハウス詩のジャンルの最初の詩において、好ましいカントリーハウスとは、中世から無名の石工などの職人たちが設計図も無しで、必要に応じて長い間営々と作り続けた「昔からの建て増しをしてきた建物の集まり」“an ancient pile” (“To Penshurst”, l. 5) 以外の何物でもないと言われたのとは、隔世の感がある。

新たに再建中のベルボワールがフェインを強く印象づけたのもその点であるらしい。1658年にクロムウェルが死に、翌年のこの頃には、彼の息子リチャードも既に護国卿を辞して、世情は体制の先行きの不透明な混乱状態にあったにもかかわらず、フェインの語り口は明るいトーンである。灰塵に帰した古い屋敷 (“a rubbish heap”, l. 11) の跡に、統一されたデザインの威容を誇る新しい家 (“a stately palace”, l. 12) が出現しつつある様を見て、自分を燃やした灰の中から前よりも美しく再生するという伝説上の鳥である不死鳥の比喻を巧みに用いて賛辞を送っている。建設の高い槌音は、長い軍事政権に嫌気がさしていた詩人の心の憂さを晴らす響きであったかもしれない。本当に、この頃王制復古はすぐそこまで迫っていたのだから。あと少しでそれは新しい時代の建設の音と響き合うことになっていた。ベルボワールの完成は1668年のことであった。

Had Belvoir not been crushed by our late quarrel,
It had not shined now in such apparel
As its re-edifying hath put on,
To shape the frame into an union.
Thus have I read the phoenix bird to die
To raise another to posterity,
And out of perfumed ashes to restore
That wonder to the world admired before:
As here you see out of a rubbish-heap
(Made so by war) a stately palace leap. (11.3-12.)

当主のラトランド伯が議会派にコミットしていたためか、王党派のフェインもベルボワールを第三者的に傍観する立場のせい、内乱は「最近の争い」(“our late quarrel” l. 3) とか単に「戦争」(“war” l. 12) とさらりと触れられ、むしろ、戦争があったからこそこ

のように世間が賞賛しないではいられないような壮麗な屋敷が建てられたのだと、内乱の罪を相殺せんばかりの逆説的な語り口である。そのトーンは、この詩に付されたエピグラフに既に明白である。オヴィディウス作の、ギリシャ軍に敗北して滅亡した小アジアの都市トロイに関する詩の行に手を入れ、トロイが栄えた跡は、今は豊かな穀物畑であるように、ベルボワールは戦いで破壊されて、新たに再建されようとしているという意味の引用が賛辞として用いられている。

ベルボワール再建には、英国建築ヘイタリアの古典主義様式を初めて紹介し、また英国最初の建築家といえるイニゴ・ジョーンズ (Inigo Jones) の弟子ジョン・ウェブ (John Webb) が、1655年から3年間かかわり屋敷の拡張のデザインなどを提案した。結局彼の設計は、主要階段とロング・ギャラリーのある建物で、殆どは石工のサミュエル・マーシの設計が採用された。ベルボワールの外観はシンメトリーの原則が貫かれるなど、この家の再建に当たり設計がどのように強く意識的されたかが次の引用においてみてとれる。

Where all to architect prescribe may see
 Their observations and their Cymentry
 So well scored out that it might give content
 To curious Wootten and his *Element*. (11.15-8.)

家の設計については、建築家達が意匠をカードに巧みなスケッチを描き、それは単に建築上の過程の革新的な試みとして賞賛されているばかりか、当時の建築の理論にもかかっているとヘンリー・ウートン (ウォットンとは発音しない) にも言及している。

この詩では、発音通り “Wootten” と表記されているが、Henry Wotton は 1624 年に『建築の要素』(*The Element of Architecture*) を出版し、英国の建築の動向に大きな影響をもたらした。彼は決して建築の専門家ではなく、ジェームズ一世の時代の外交官で文人でもあった。彼の長期にわたる海外滞在の間には、ドイツ、プラハを回り、ウィーンなどではルドルフ二世のあのゴシックの城を見て見聞を広めた。ヴェニス大使として彼が住んだイタリアでも、当時の新しい家の建築様式を見たり、その理論を学び、そのようにして得た経験や知識をもとに、英国帰国後、ヒューマンイズムの原理に即して建てられた建築環境の中で、いかに文化的で優雅なそしてノーブルな生活をするかをテーマにして、一冊の本を著したのであった¹³⁾。

ベルボワールの谷を見下ろす丘という立地条件は以前の家と変わらない。しかし、この家の再建には、今までのそれと相違する点に詩人のフェインは気づいている。マーシかウェブか、または二人を指すのか判然としないが、建築家が (“The quaint contriver” l. 19) 見る人の賞賛をかうためにあらゆる目新しいデザインに挑戦して、家自体が居心地良く住むための空間ではなく、建築家の技量をひけらかす一つの場となってしまうことである。滑らかに削られた石や美しい窓、そして当時流行になりつつあった玄関のペディメントに家の持ち主の紋章を刻むなど。

The quaint contriver, forming all anew
 To challenge admiration from the view

Of the beholders raiseth such a pile
That smooth-hewn stone seems pleased, and windows smile,
The bounteous Vale adoring it the while. (11.19-23.)

新しい建築原理を認めながら、詩人の目は建築家の自己顕示的なカントリーハウスへの関わり方に対して、懐疑的な視線も送っている。自分自身もカントリーハウスの主人である彼は、家が持ち主の美德のメトネミーであるという基本的な認識を忘れずに、敢えてこの詩の中で持ち主の名前に言及する必要はないと断言している。なぜなら、この家の人々の生活のありかたや昔からの古い名誉が、名前を語るのと同じことを語るのだから。屋敷の建築上の新機軸を銜うよりは、それを住みこなす家の所有者の生き方や名誉をフェインは重要だと考えているのだ。彼は、ウートンの著書を読んでいたかもしれないが、最新の建築物の中で、ラトランド伯爵家の一族が受け継いでいる伝統をベルボワールの現在の持ち主が享受し、末永くそれが人々に推奨されることを詩人の願いとして詩を結んでいる。

And, that I need not here the owners name,
Manners and ancient honour speak the same;
Which that they may enjoy long and commend
From age to age shall be my wishes' end. (11.28-31.)

外観の美しさや新奇な趣向を凝らしたベルボワールと対照的に、慎ましく、また家の居住性という機能に重点をおいた小さなカントリーハウスも同じ頃建て替えられていた。それは、に奇しくもベルボワールの持ち主ラトランド伯が、ベルボワールについて詩を書いたマイルドメイ・フェインの父、第一代目のウエストモーランド伯に1622年売った、リンカン州の中世からのフルベックというエステートであった。相続の時にマイルドメイの弟、フランシス(1611-80)へ与えられたが、彼は王党派の軍人で1644年にリンカンが議会派軍に占領された時、捕虜となった。多額の身の代金を支払って解放されたのが1652年であったため、その後結婚してフルベック・ホールを建て直したのは1659年のことであった。人生の盛りの年月を内乱のために犠牲にすることを余儀なくされた弟の新しく建てられた小さなカントリーハウスのために、兄であるマイルドメイの相続した大きくて立派なカントリーハウスを念頭に置きつつお祝いの詩を書いたのが、「フルベック:このように小さきものを大きなものと比較して」(“Fullbeck: Sic magnis componere parva”)というヴェルギリウスの農耕詩からの引用を副題にしたものである。屋敷は18世紀に厩舎と執務室を除いて焼失したため、フルベックに関しては16世紀に建てられた執務室を別とすると、この詩以外に歴史的な資料は残っていない。

「フルベック」では、詩というメッセージの発信者の大きな屋敷と、詩の受け手である弟の小さなカントリーハウス、フルベックとの間に大小の差異があるという事実を無視できない。かといって、カントリーハウス詩の伝統の枠組み、即ち、小規模の質素で実用を旨とする家を是としその所有者の美德を賞揚し、一方、大規模で豪華な外観のみを誇る家とその所有者の虚栄を非難するという二項対立を当てはめることも不自然である。この二律背反を解決するために、マイルドメイは従来の伝統的な前提を変革して、巧みに兄弟の状

況の差異を詩にとりこんでいる。

詩の副題にラテン語で古典の引用を行い、なおかつ、引用と同じ内容を詩の冒頭に一般論として「小さいものを大きなものと比較するとしても、小さいものもそれに応じた賞賛を得るものであるから」ときりだして、「このように再建されたフルベックのあるじの美德を隠さないことにしよう」と直截に言って、優れた旅行家であり優れた軍人であった弟のフランシスに敬意を払い、ぎこちなさを払拭している。

Since lesser things with greater may compare
And in proportionable praises share,
Let Fullbeck (though beneath the cliff) not hide
Its patron's glory thus re-edified..... (11.1-4.)

新しく再建された屋敷自体の細部、外部の庭園、果樹園、散歩道に加えて、そこから望める屋敷の美しさも超えんばかりに美しい広い眺望や、狩りのできる野山を賛美して、詩の最後ではフルベックに「地上の楽園」(“Earthly Paradise” l. 59) というクリスチャン・ネームをつけている。カントリーハウスは本来、楽園の典型的なトポスであり、ここではそれが特に聖書的な色彩の強い背景を持つことは、狩りをする野を「幸福の理想郷」(“the Elizian plain” l. 38) と呼んで、当主のフランシスの宗教的な関心のあり方にも配慮したのであろう¹⁴⁾。

この詩の冒頭と結論は、カントリーハウス詩の定石を意識した枠を形成しているが、このフルベックという地上の楽園は、その命名には逆説的にも、小規模で簡素ながらも新しい建築に関する理念を体現するものであったようだ。半世紀ほど前にジョンソンが「実用」(“use”) と表現した言葉は、17世紀も半ばを過ぎると「便利さ」(“convenientness” l. 6) という、実用よりはその意味の内包をより制限的に表す、機能の効率の高さという意味で問題視されるようになったと言える。その上、「便利さ」は「美しさ」と「結婚している」、つまりこの家は機能美という近代的とも言える建築の美学を基本原理として造られているようだ。

Where all such architecture do express
They marry beauty with convenientness:
Whether to parlour, hall, or other rooms
We would apply our just encomiums,
And so confine them to the ceilings, doors,
The windows, staircase, chimneys and the floors..... (11.5-10.)

パーラー、ホールがあり、階段は単数形であることから、それは家のプレスティージを表す正面階段であろうし、窓や煙突の複数形は光を十分取れるガラスを使う窓が沢山あり、冷湿の英国の気候には、多分煙のこもらない煙突のついた暖炉が複数の部屋にあることを示している。また、床、天井そしてドアも各々の機能をしっかり果たすものがしつらえてあり、生活の快適さの程度は改善されつつあったかもしれない。

眺望の素晴らしさもさることながら、豊かな収穫を約束する滋味の豊富な土地や豊かな水を供給するトレント川などは、農業生産に結びつき、鷹狩りや兎狩りの獵園は、純粋な狩りの楽しみというより、肉体の健康のためのスペースと場所自体の機能に関心が向けられている。狩りはもともと鹿狩りにはじまり、16世紀になって貴族の間でカントリーハウスの建築が流行っていた時代に既に、エリザベス女王を始め彼等より格式の高い貴族は、鹿狩りを娯楽の一つとして楽しんでいた¹⁵⁾。パーク(Park)はもともと王室の御獵林であったのだ。それを貴族達がカントリーハウスの領地に取り込んでいったので、そのエステートは拡大していった。それから一世紀あまり経って17世紀半ばになると、小貴族の館フルベックでは、狩りは近代のスポーツにかなり近い意味合いを含んだものに変化している。

内乱から20年近い歳月が流れた1650年代の、戦いにより破壊されたカントリーハウスの様々な再建のうちほんの2,3例をカントリーハウス詩の中に瞥見しただけでも、貴族階級の生活様式や生活感覚が少しずつ近代の方向へ動き出していたことが理解される。しかも、その変革は政治、経済、文化の中心地ロンドンではなく、宮廷から離れた地方のボルソーヴァ、ベルボワールそしてフルベックのように小規模で、経済的にもあまり裕福ではないカントリーハウスにおいて、また建築にはアマチュアの施主が、石工や大工などの職人達に建てさせた屋敷から生じつつあった。もっともベルボワールには、建築家ウェブが携わっていたのだが。

このような近代への動きの中で、1650年代の半ばに起きて後の時代の建築様式へ決定的な影響を及ぼしたのは、ジェントリ階級のジョージ・プラット卿がパークシャー州に建てたコーレスヒル(“Coleshill”)であった。この屋敷は様々な意味で時代精神の象徴的な具現化であった。コーレスヒルの意義については、当時の文学的な状況に大いに響き合う要素が存在する。まず、既に別の機会に考察したように、17世紀半ばに、主に王党派の貴族が政治の舞台から追放され、地方の自分の本拠地にあるカントリーハウスへの隠棲を余儀なくされた。そのような閉塞状況は、深く自己の内部へ沈潜する内省の文学を生み、孤独が、詩作はもちろん古典文学やフランス文学の翻訳の分野においてさえ主流のテーマとなっていく¹⁶⁾。議会派軍の勇将、フェアファックス將軍は王の処刑というクロムウエルの路線とは意見を異にし、ヨークシャーのアップルトン邸に隠遁して孤高を保ちつつ庭園作りにも励みながら、フランスの詩人サンタ・マン(Saint-Amant, 1594-1661)の「孤独」という詩を1650年頃から訳した。このような翻訳という行為は、外国文学或いは古典を経由して、同時代の英国の問題を読み解き、それに間接的なコメントを行い、また敗北した大儀への忠誠というコードを含んだ主張を行う方法でもあった¹⁷⁾。フェアファックスの訳詩の中で、庭園で孤独に浸る語り手の言及する倒れる檜の木は(11-14行)、ことに王党派の人々が国王処刑を表現する際の常套のメタファーであった。

多くの隠棲の詩が証明するように、孤独のテーマは当時の貴族の生活のあり方の変化と呼応している。ファウラーによれば、以前に比較すると、彼等のプライベートは確保され易くなっていたのだ¹⁸⁾。キャビネット・ポエムが多く書かれたり、事実上無いも同然の英国国教会の代わりとなった、宗教詩の出版の隆盛はやはり人々に神と向き合う孤独な瞑想を促した。釣りのマニュアルのように見える『釣魚大全』(The Complete Angler)を書いた不屈の王党派アイザック・ウォルトン(Izaak Walton)は、川辺りで無心に浮きを眺めて釣りに耽りながら、神への崇拜を行っていたのであり、政治的には1653年の残部議会の解

散という危険な風景から安全な自然の風景の中に姿を隠していたのであった¹⁹⁾。

このように騒乱の世界に背を向けて自己に深く関わり合うというプラヴァイシーを追求する精神的風土に加えて、生活の快適さ、清潔さを求める感性はコーレスヒルに収斂することになったのだ。コーレスヒルは、内乱の影響ではなく火災によって建て直しの必要に迫られて、1652年頃の再建の前に、既に建築が始まっており一階部分は出来上がっていた。しかし、ジョージ卿は父の死によってコーレスヒルを相続すると、伝統的なカントリーハウスの再建という父の遺言に反して、その頃既に完成していた部分も取り壊し、全く違ったコンセプトでコーレスヒルの建築に新たに着手することにした。

残念ながら、1952年にそれも焼失したが、詳細な資料が残されていて、二点において最近興味ある解釈が世に問われた。結論を急ぐと、第一は、コーレスヒルが、空位期、つまり国王不在の1650年代の前と後の二つの異質な時代の建築様式の橋渡しとなるエポック・メイキングな建築物であるという指摘である。第二は、設計者は、従来、特に今世紀の初め以来定説的に認められてきたジョージ卿のいとこのロージャー・プラット卿ではなく、イニゴ・ジョーンズであって、老齢の彼の助手を勤めたのがロージャー・プラット卿であるという説である。ティモシー・モウル (Timothy Mowl) とブライアン・アーンショウ (Brian Earnshaw) は、真の労作である『国王不在の時代の建築：クロムウェル政権下のピューリタン・クラシズムの起源』(Architecture Without Kings: The rise of puritan classicism, Manchester, 1995) を共著で著し、コーレスヒルに典型的に見られる1650年代の建築様式を、ピューリタン・ミニマリズム (Puritan Minimalism) と新しく命名し、都市のロンドン、各地方のカントリーハウス、そして大学などの様々な建築から庭園に至るまでその様式の広がり論じている²⁰⁾。

『国王不在の時代の建築』によれば、ピューリタン・ミニマリズムとは、かなり図式的になるのを恐れずに定義するならば、チャールズ一世下の二つの全く異質な建築様式を両親として生まれた一種の鬼子的とでも言うべき新しい建築様式であった。一方は宮廷のローマ風建築様式で、18世紀になってポープが節度の無い豪華さを諷めたパーリントン卿のような豊かな人々が好んで発展させた様式であり、他方は、宮廷以外のロンドンや地方の建築様式で、ジョン・サマーソン (John Summerson) が Artisan Mannerism (職人的ミニマリズム) と些か斜めに構えて命名した様式である²¹⁾。

この両者がまじりあって生まれたピューリタン・ミニマリズムとは、素人的な、思いもつかない、しかし概ね実用主義的な古典主義の建築様式で、1638年から1660年の22年間という短期間に、ロンドンも含めて各地方においてそれぞれのペースで形成されていった。レンガという新しい建築資材、オランダやフランスの影響も受けつつ、特に英国南東部で活発に進んだ。経済性を重んじて、窓、ドア、蛇腹、コーニスなどの配列などにはあまり凝らないで、古典主義様式の本来もつ、列柱やエンタブラチャー (梁) の形の釣合に関する秩序正しい関係を緩和した。オランダではこれを、Flat Baroque と名付けており、チャールズ二世朝風、レン様式などと呼ばれることもあったが、英国では一定の命名されはされず、それでも空位期以後50年間も続いた世俗建築の確立した標準的な様式となった。

別の言い方をすれば、文学のジャンルを例にとっても1640年からの検閲制度の事実上の廃止以後、夥しい作品の出版が可能になったように、空位期はいわば建築の自由化の時代であった。チャールズ一世下では、王室の宮繕長官がロンドンでは建築の許認可権を持ち、

それは国王の意向を大いに反映するものであったのだから。時代と共に変わろうとする精神の建築家にとっては、内乱の時代そして空位期はまさに古いスタイルからの解放の時代であった。また、建築家は、王党派の貴族達が社会的に停滞していた時代には、議会派軍の人々や平民の裕福な人々の建築を設計する需要に応ずる必要がでてきた。

このような新しいピューリタン・ミニマリズムの様式においても、革新性と創意にあふれ自信に満ちて地位のある建築家であったのは、若いジョン・ウェブではなく老齢のイニゴ・ジョーンズであったと主張して従来の説に反論しているのが『国王不在の時代の建築』である。ジョーンズは、大陸旅行の経験から諸外国の様々な建築を知り、イタリアのパラディオの古典主義様式の英国への輸入者であり、ジェームズ一世、チャールズ一世両王の宮廷の御用建築家、仮面劇舞台作者であった。その華々しい経歴が、彼をウィルトン・ハウスの南面とコーレスヒルという建築史上最も偉大で影響力を持った建築物の建築家としての業績を剥奪することになり、1645年には滞在していたハンプシャーの屋敷が議会派軍に打ち壊された時、毛布に巻かれて放り出され、捕虜になった後釈放されて貧窮のうちに死んだという伝説を作っていた。権力者に寵愛を受けた人の零落は人生の劇的なエピソードに仕立てられ易い。しかし、サマーソンは流石に、彼がロンドンの最も立派なサマセット・ハウスで死んだと言っている。

内乱前のスチュアート朝から空位期の初期まで八十年近くも生き抜いたジョーンズはしたたかで、内乱後も内乱前と変わらずにペンブローック伯をパトロンにすることができた。その名門の伯爵はチャールズ一世との訴訟がもとで王と不仲になり、内乱の際には議会派に身を投じていたのだ。ジョーンズは1614年に王室宮繕長官の地位にありつつ、従来はフランス人の造園家イサク・ド・コウ (Isaac de Caus) の設計とされてきたペンブローック伯のウィルトン・ハウスの設計に1635年から40年の間はド・コウを助手として、そして1647年の火災後1648年から52年までは弟子のウェブを助手として二回かかわった。シェイクスピアの『お気に召すまま』が上演され、シドニーが『アーケイディア』を書き、多くの作家が訪れたウィルトン・ハウスの南面と、その内部の直方体を二つ合わせた大きさのダブル・キューブと呼ばれる古典主義の比率を生かした立派な部屋は、ジョーンズに帰すべき仕事である。

ウィルトン・ハウスの南面には、貴族の威厳を表わすために多くのカントリーハウスが用いた円柱の列は既に存在しない。機能的ではない装飾の排除は、ジェームズ一世の宮廷用の建築、国王の権威を象徴するホワイトホールのバンケットティン・ハウスやグリニッジのクイーンズ・ハウスなどを設計し、華麗な宮廷仮面劇の装置を作り続けたジョーンズからは、理解し難い建築上の原理であるが、実は、機能重視の単純明快さを良しとする彼のデザイン上の基本的志向は、彼が王室宮繕長官になったのと同じ年に早くも彼自身の言葉で表明されている。「ギリシャの建築の方がローマのそれより英国の建築にはずっと適している。なぜなら、ギリシャの建物は実用を旨とし、そんなに贅沢ではない。」これは、彼が手に入れたパラディオの『建築四書』の本の余白への1614年の書き込みである²²⁾。

このような建築の根本的な哲学は、既に検討したマイルドメイ・フェインがラトランド伯夫人に宛てて書いたベルボアール屋敷再建を祝う詩の中で言及したヘンリー・ウートンの『建築の要素』(1624年)が同書の最初に、“Well-building hath three conditions: commodity, firmness and delight”つまり、家の設計は「便利さと、堅固さと喜び」と機能美を基本にす

べきであると主張している内容と軌を一にする。しかし、ウートンが、1624年に出版された彼の自著、英国初の建築論の中で、1622年に既に完成していたホワイトホールのバンケットイング・ハウスにもジョーンズにも触れていない事実は、彼がそのどちらにも否定的であったと解釈される。ウートンは、パッラーディオよりは紀元前一世紀の建築家ヴィトルヴィウスやアルベルティに溯り、英国16世紀の円柱や装飾過剰に反対を表明している。彼は自著の読者を、宮廷を越えた多くの人々、中でも彼の主張する純粋な意味での古典主義の持つ簡素さの美を真に理解しうる、本物の洗練されたエリートに想定しそのような人々に訴えかけていたのだ。

詩人でもあったウートンの考えていた、プロテスタント的ジェントルマンの理想のライフスタイルは、極限的には彼の「幸福な生活の特徴」(“The Character of a Happy Life”)と題する詩の次の数行に凝縮している。“This man is freed from servile bands / Of hope to rise, of fear to fall ; / Lord of himself, though not of lands / And having nothing, yet have all²³⁾.” 世俗的な浮き沈みなどの賤しいかせから自由な人は、自分自身の主人であり、土地も何もなくても全てをもっているのだというこの逆説には禁欲の哲学のもつ深い豊かさがある。また、このような簡素な単純さの美学の背後には、華やかな装飾性のよぶカトリックへの連想に対する拒絶の心情も働いているのだ。

ウートン著の1624年出版の『建築の要素』は、ジョーンズが手に入れたパッラーディオの『建築四書』の余白へに書き込みをした建築理念を書物の形で表現したものとモウルとアーンショウは指摘している。ジョーンズを彼自身の内包していた二律背反的な建築美学の原理の矛盾から解放し、ピューリタン・ミニマリズムと名付けられた建築の手法へ導いたのは結果的には内乱という政治的体制の一大変化であった。ジョーンズが手がけた議会派の貴族ペンブローク伯邸の次は、やはり議会派のジェントリであるバークシャー州のジョージ・プラット卿のコーレスヒルの設計であった。1650年代は、社会的にも経済的にも流動的な時代であったので、ジョージ卿のようなジェントリの階級上昇が可能であった。また、バークシャーは地理的にロンドンという権力の中心の都市から少し離れていたため、ある種の自由が保証され、別荘的な意味でのカントリーハウスを建設するには適した条件を備えた場所柄であった。

それに加えて、ジョージ卿がジョーンズの新しい建築理念に基づいた設計を受入れ易くするもう一つの要因があった。ジョージ卿の妻の父、バークシャーのハンフリー・フォスター卿は、彼女の結婚の10年余り前に、むしろピューリタン・ミニマリズム風というべき設計で、伯爵のウィルトン・ハウスを准男爵の位に相応しく遥かに小さくしたようなオルダーマストン・コート (Aldermaston Court) を建てていた。(図1) つまり、既に1630年代半ばに、宮廷との関係もあり熱心な王党派であったため、ハンフリー卿が従うべき建築原理はチャールズ一世お気に入りのパッラーディオ風の古典主義様式であったのだが、そのような人物にして建築美学上の様式の趣味は国王のそれから離反しはじめていたのである。バークシャーでは、ほぼ同じ頃、同様なピューリタン・ミニマリズム様式、円柱のないシンプルなデザインのカントリーハウスが二軒建ち、いずれも王党派のジェントリの屋敷であった²⁴⁾。(図2) この事実は、彼等が必ずしも宮廷風へ対抗したのではなく、むしろ貴族達の建築様式の趣味に対して、ジェントルマン側の尺度から計った独自の好ましき建築様式の趣味が、早くも1630年代に起きていたものと解釈されている。



図1 オルダーマストン・コート



図2 ウェスト・ウッドヘイ・ハウス

このような状況に加えて、ジョーンズは、コーレスヒル風の設計図をやはり1630年代後半に二枚も制作している事実もある。その上、今まで誤って設計者と見做されてきたロージャー・プラットは、その通説を覆す記録を自分でしたためていたのだ。プラットは年令が遥かにジョーンズより若い、内乱が終わって早々1649年に大陸から帰国して彼を訪ねた。歓迎された若い弟子は、議会派軍の占拠していたサマセット・ハウスに住みはじめたジョーンズとの会見の模様を克明にノートに残している。革命軍であった議会派の人々も、体制派になるや贅沢な暮らし振りであったという記録や、ジョーンズがかったの宮廷建築家であったにもかかわらずそれを許されていた事実は、様々な意味で興味深い。

ロージャー・プラットは毎夏を必ず従兄弟のジョージ卿のもとで過ごし、ジョージ卿の父ヘンリー卿は、ロンドンの事業家で生前にジョーンズを紹介されていた。ジョージ卿の孫や他の人々の残した忘備録などの文献の新しい読み直しによると、このような人間関係の中で、ジョーンズが1652年に始まったコーレスヒルの設計者であることは事実であり、老齢の彼は、多分、殆どロンドンに在り、別の従兄弟エドモンド・ステュワードとロージャーがパークシャに留まって建築の実際に携わっていたのであった。それを裏付けるのは、ロージャー・プラット自身が証拠として残した、彼のコーレスヒルの建築に関するノートである。その記載の程度は、彼がまかされた天井部分の漆喰に関する記述を除くと、あとの部分は客観的に至極簡略なのである。一方、コーレスヒルの建築により成功を収め、ロージャーが独立して設計監督した他の三軒のカントリーハウスについての彼の建築ノートは量が格段に多く、主体的に非常に克明に記されていた。

コーレスヒルの建築様式をピューリタン・ミニマリズムと命名する所以は、ひとつには、ジョージ卿のように建築の施主が議会派に肩入れしており、コーレスヒル以後、議会派軍のにクロムウェルの高官達のカントリーハウスが同じ建築のスタイルを取り入れたからである。クロムウェル自身は、ホワイトホールに住み、週末はハンプトン・コートで狩りをするという、チャールズ一世紛いの生活を送り、内外の戦争に忙しかつたので、新たな建築は行っていないが、モウルとアーンショウによれば、彼の高官達の建てたカントリーハウスは九軒ある²⁹⁾。コーレスヒルのジョージ卿といい、議会派軍の高官達といい、経済的にそれほど余裕がなかったのに、彼等の建てたカントリーハウスの多くは、宮廷風の円柱を連ねるような派手さとは程遠く、地上二階建ての矩形の寄棟屋根造りで、英国の寒い気候を考慮すると煙突が大きすぎる感は否めないとしても、上下に開けるサッシの窓が立面に区切りを与えているだけで、装飾は極度に控えた、まさにミニマリズムと言うべきシン

プルな外観を持つ様式であった。(図 3A, B)

コーレスヒルの平面図は、外観に劣らず革新的であった。(図 4A, B) その新しさを理解するためには、そこへ至る歴史的なプロセスに簡単にふれる必要がある。既に述べたように、17 世紀の中頃には、生活のアメニティーへの要求、プライバシーへの欲求は貴族や富裕な階級の人々の間で以前よりは強く求められるようになってきた。中世ではカントリーハウスの中心であった広間は多目的室として使用され、客も迎えるが主人の家族から召使いに至るまで雑多な人々が生活をする不潔で騒々しい、家の中にありながらいわば公的な、社会的な空間であった。主人の家族は、中世の終わり頃から、広間の上に階段で通じるパーラーと呼ばれる私的な部屋を作り、広間から待避する工夫を行っていた。エリザベス朝後期に、二階のグレート・チェインパーが主要な客間となると、そこへ通じる主要階段が広間に造られることになり、広間は単なる玄関となり、そこでかつては食事をしてきた召使も彼等専用の部屋へ追いやられて、広間の多目的室的な機能の各々が分離をはじめた。このようなカントリーハウス内の間取りの変化は、長い期間をかけて、多くの家で少しずつ徐々に生じた現象であったが、それまでの生活様式や意識、感覚まで含めた次元の様々な問題を一軒の屋敷で殆ど全て解決して、限りなく近代或いは現代の家に近い型

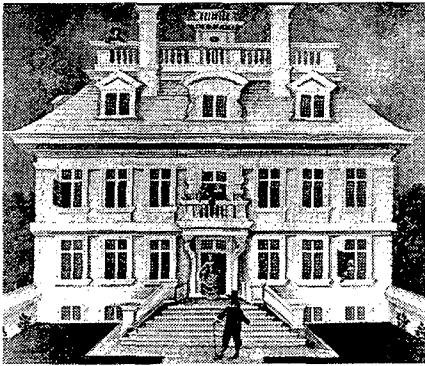


図 3A ウイスベック・カスル

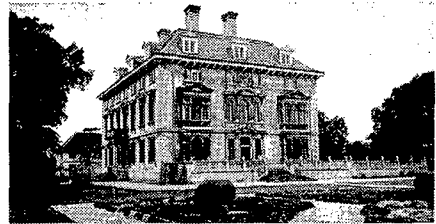


図 3B ソープ・ホール



図 4A コーレスヒル

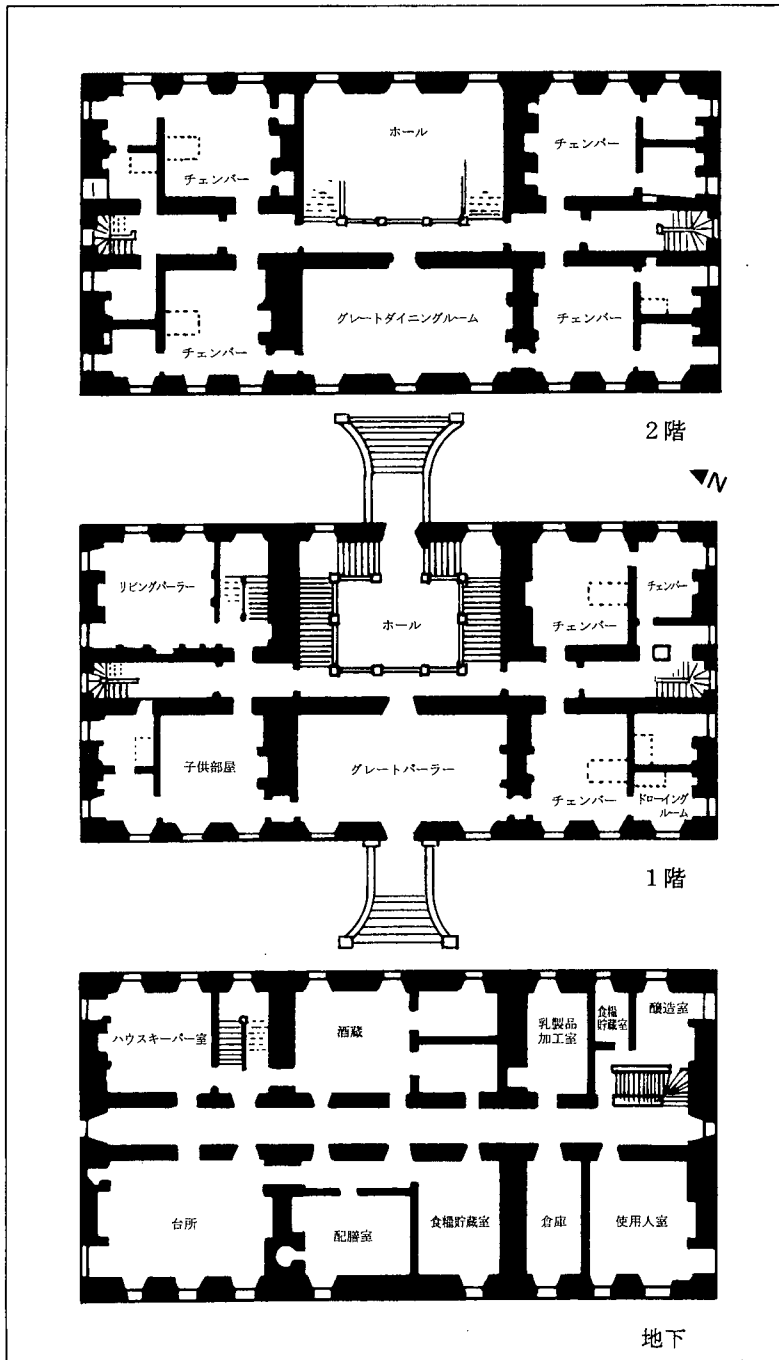


図 4B コーレスヒル (平面図)

を実現したのが、コーレスヒルであったと言えよう。

コーレスヒルの近代性を確保した家の平面図は、ダブル・パイルといわれる英国で初めての家の端から端まで通る廊下を作り、それをはさんで南北の両側に部屋を配列した間取りである。(図 4B) また、広間から二階の客間グレイト・パーラーへ通じる正面階段の設置は勿論、廊下の両端にも召使専用階段を設けた設計であった。廊下の萌芽的なものは、ロング・ギャラリーとして早くからカントリーハウスに存在したが、部屋と部屋との分離を可能にする機能を果たすことは不可能であった。

召使専用の裏階段は、召使を不可視の存在とし、各寝室からの便器などを階下へ運ぶ時に、客と出会う無様なことも無いようになった。台所や執務室などは地下に配され、屋根裏部屋へ召使の寝室が作られ、彼等の家の中における動線は、今までの水平な方向から垂直方向へと変化した。更に完璧な召使と家族の分離は、次の世紀の各部屋と召使のホールとを結ぶベルのシステムを待たなければならない。この頃から、身分の低い者達をなるべく家族や客から遠ざけておけることが、カントリーハウスの所有者の社会的なランクの高さの象徴となり始めた²⁶⁾。というのは、カントリーハウスの使用人はジェントリの子弟ではなく、ヨーマンなどより身分の低い階層から雇われ、女性の使用人が増えてきたのであった。1646 年に後見裁判所が廃止されて以来、ジェントリ所有の土地に対する貴族の権利が廃止され、ジェントリは独立した地主となったので、もはやスチュワードとして貴族の使用人となる屈辱を受ける必要がなくなったのだ。カントリーハウスにおけるプライベートへの要求は、上品さも求める要求と重なる部分を持つようになっていったのだ。家族と召使の分離が起ると、家族内の家父長的階層的な身分関係と同様に、召使の間にも上下の階層関係が明確になった。

コーレスヒルの生活の快適さは、廊下によって南北に区切られた部屋を、夏冬使い分けて享受され、各部屋ごとのプライベートも確保され、家族の成員個々の間のプライベートが保たれるようになった。廊下のない従来の屋敷では、家の内部を動く行為は部屋から部屋への移動以外にはなかったもので、寝室にしても、ベッドは、上部を天蓋が覆い、四本の支柱の周囲は厚いカーテンが取り巻いたものであった。まさにそれは、部屋の中のもう一つの部屋であり、寒さだけではなく、プライベートをそのようにして囲い込んでいたのだ。

また、地下の階は、召使のホールに加えて、元来母屋から切り離されて別棟や外部に存在することの多かった、台所、酒蔵、醸造所、乳製品の加工所などが配されて、建築費の節減になったと同時に、数を減らしつつあった少数の使用人でこの屋敷が維持管理可能な様子をしのばせる平面図である。(図 4B 下段) 実際の住まい方にもミニマリズムの精神は生きているのだ。ハウス・キーパーや召使のホール、醸造所、乳製品の加工所などを除いて、この地階をミニ・ミニ・ミニマリズムに縮小すると、現代のごく普通の英国人の台所はその構造の部分として、その外の要素を殆どすべて含んでいるのは面白い事実である。生活の中で最も地味な、しかし欠かせない部分でも、近代のかたちはこのように形成されつつあったのだ。

コーレスヒルは、ジョージ卿が謹厳なる書斎派の人物で、1652 年の再建の時も経済的不如意から、従兄弟のロージャーに建築資金を借りる有り様であったから、詩人のパトロンである筈もなく、この建物が建築史上どのように重要であっても、これについて賛美の詩が書かれてはいない。1697 年にここを見学を訪れた女性の旅行家シーリア・フェンズ (Celia

Fiennes) が日記風の旅行記に、当然、散文体で、廊下が屋敷の東西に端からずっと通り、召使いの部屋も清潔で上品なことに深く印象づけられた様子を綴っている。

..... by Farington is a fine house of Sir George Pratts called Coalsell [Coleshill]..... runs a gallery all through the house and on each side severall garret roomes for servants furnished very neate and genteel²⁷⁾

コーレスヒルが建設されてから 40 年近くたった後にも、まだ廊下を表わすのに gallery という言葉を使う以外にはなかったが (O. E. D. によれば、現代の意味での corridor の初出は遅く、パイロンが 1814 年に用いている)、その機能を理解し、ピューリタン・ミニマリズムのもたらした家屋の革新性の神髄を正しく見て評価した記述を残している。建築は存在として力強いモニュメントであるとしても、建てられてから三百年後には焼失し、物自体の脆さを人に悟らせるのである。しかし、コーレスヒルに縁もない第三者的な観察者、または家には住む立場にある女性の目から見て記されたと思われるフェンズの短い記述は今まで生き長らえた。それは、この家の設計図や、ロージャー・プラットのノートすら語り得ない、書かれたテキストの不滅の力を発揮し、コーレスヒルに最高のオマージュを与えている。彼女は、当時の英国の社会に起きていた新しい現象と、再び盛んになりつつあったノルマン征服以前の英国についての尚古趣味の研究にも関心を持つ好奇心旺盛な才女であった。

モウル及びアーンショウの共著、『国王不在の時代の建築』がピューリタン・ミニマリズムと新たに命名したこの建築様式は、17 世紀半ばに一つの典型的な型としてコーレスヒルに顕現した。けれどもこのスタイルの先駆的な建物は、ジョージ卿の妻の実家、オルダーマストーン邸が示しているように、1630 年代に既に王党派のジェントリの建築の原理であったし、王政復古以後は、王党派の人々にとっても建築費の節約となったばかりか、王党派の企業家にとっては、ロンドンの都市開発の際に安価な建築様式として採用され、いわば英国の建築の標準の様式となった。ロンドン大火後は、特に経済的に沢山の建築を進める必要に迫られ、内乱中にパリで暮らした人々の持ち込んだ洗練された生活様式やセンスを取り入れもして、基本的にはピューリタン・ミニマリズム様式やその変形の様式で多くの建物が建った。ピューリタン・ミニマリズムはカントリーハウスにおいても、都市のタウンハウスにおいても使われた、気取らない商人やジェントリの様式で、地方と都市をつなぎ、また内乱の前後の時代という異質な時代のかけはしとなるものであった。その結果、ボヘミアのホラー (Wenceslaus Hollar) が詳細にその姿を銅版画に残した、比較的小さな建築物がひしめき合っていた王政復古以前のロンドンとは全く異なった町が出現したのであるが、建築美学上は多少退屈な都市になった。それに変化をつけたのは、18 世紀のナッシュ (John Nash) などであった。

勿論、王政復古以後は、それまで地方のカントリーハウスに蟄居を余儀なくされて、謹厳なピューリタンの抑圧に押しつぶされていた貴族達は開放感に溢れて、ロンドンへ楽しみに集まって来たので、田舎はしばらくの間、退屈の代名詞になった。名誉革命後、政党政治が確立するとホイッグ党の政治家達がふたたび、政治の地方の拠点としての巨大なカントリーハウス建築に着手する時がやって来る。

注

- 1) 三篇の詩はいずれも, Alastair Fowler, ed., *The Country House Poem: A Cabinet of Seventeenth-Century Estate Poems and Related Items* (Edinburgh, 1994) に収録されている。
- 2) 本論においては, ピューリタン・ミニマリズムについては, 次の非常に啓蒙的な大作に負うところが多い。Timothy Mowl & Brian Earnshaw, *Architecture Without Kings: The rise of puritan classicism under Cromwell* (Manchester, 1995)。
- 3) Graham Parry, *The Seventeenth Century: The Intellectual and Cultural Context of English Literature, 1603-1700* (Penguin, 1989), 55.
- 4) Trevor Lummis and Jan Marsh, *The Women's Domain: Women and the English Country House* (Penguin, 1993) 34-5.
- 5) *Architecture Without Kings*, 19
- 6) Mr. Alionby, "On Bolsover Castle", Fowler, 167-71; cf., *Ibid.*, 164.
- 7) Mark Girouard, *Robert Smythson and the Elizabethan Country House* (Yale, 1983), 205-32.
- 8) Fowler, 317.
- 9) *Loc. cit.*
- 10) 岡田宏子, 「個人空間の起源—英国 17 世紀中期のカントリーハウス詩の一研究—」, 『椋山女学園大学研究論集』第 29 号「人文科学篇」, 1998 年 3 月, 1-11.
- 11) Fowler, 258.
- 12) *Ibid.*, 248.
- 13) Parry, 72-8.
- 14) Fowler, *Loc. cit.*
- 15) Anthony Vandervell & Charles Coles, *Game and the Landscape: The Influence of the Chase on Sports Art and Scenery* (Debrett, 1980), 245.
- 16) Fowler, 218.
- 17) Steven N. Zwicker, ed., *English Literature 1650-1740* (Cambridge, 1998), 146.
- 18) Fowler, *Loc. cit.*
- 19) Nigel Smith, *Literature and Revolution in England, 1640-1660* (Yale, 1994), 328-9.
- 20) 以下は, *Architecture Without Kings* passim..
- 21) John Summerson, *Architecture in Britain 1530-1830* (Penguin, first pub., 1953, rpt., 1989), 157.
- 22) Quoted in *Architecture Without Kings*, 1.
- 23) *Ibid.*, 67.
- 24) *Ibid.*, 59. によれば, East Hampstead Lodge (c. 1634-45), と図 2 の West Woodhay House (1635) の二軒のカントリーハウスである。
- 25) *Ibid.*, 100-27. 図 3A の裁判所長官, John Thurloe のケンブリッジ州の Wisbech Castle (1655-7), 図 3B の国務大臣, Oliver St. John のハンティンドン州の Thorpe Hall (1653-6) など。
- 26) *Woman's Domain*, 40.
- 27) ed., Christopher Morris, *The Illustrated Journal of Celia Fiennes 1685-c. 1712* (Macdonald, 1982), 47.